

季節のおはなし・旅便り

2025年度 ラストの「旅便り」です。

今年も1年ご愛顧いただき誠にありがとうございました。来年も変わらぬご愛顧のほど宜しくお願い致します。
来る年も皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



早いものでカレンダーも残すところ、あと1枚となりました。
振り返れば、季節ごとに移ろう景色に心を寄せながら
皆さまと共に紡いできた旅路は
今年もたくさんの笑顔と出逢いに恵まれました。



冬の季節が深まる12月

今年のラスト号は静かに締めくるひとときの旅へのご案内いたします。
1年間ありがとうございました。



中山観光自動車株式会社
NAKAYAMA KANKO



師走

1年の締めくくりとなる12月は、街の景色も人々の心もどこかせわしない気配に満ちています。
気温がぐっと下がり、吐く息が白くなる頃
日本の暮らしには古くから伝わる行事がいくつも顔をのぞかせます。

まずは **冬至**（2025年は12月22日）

1年でいちばん夜の長い日を境に
「明日からまた陽がのびていく」という希望を込めて
ゆず湯に入り、かぼちゃをいただく風習があります。
温かな湯気に包まれながら、1年の無事にそっと感謝するひとときです。

そして、年の瀬が近づくと響いてくるのが 除夜の鐘
煩悩の数とされる108つの音が静かな夜に広がり、
心を清め、新しい年を迎える準備が整っていきます。

街ではイルミネーションが輝き、
子どもたちはクリスマスを心待ちに…



除夜の鐘が108回鳴らされるのには、人間には108つの煩悩があるという
仏教の考え方がもとになっています。この煩悩の数だけ鐘を鳴らすことで、
一つ一つの煩悩を払いのけ、清々しい気持ちで新しい年を迎えることが
できると言われています。

煩悩の種類: 怒り、ねたみ、執着など、人を苦しめる心の迷いを指します。

鐘の回数: 108 という数字は、煩悩の数を表しています。

イルミネーションもクリスマスツリーも、クリスマスの時期を彩る
素晴らしい存在ですね。見ただけで心が華やかになります。
寒空の下で輝く光の演出は、見ている人に温かさや感動を与えてくれます。
特に大切な人と見るイルミネーションは格別ですね。
クリスマスツリーの習慣は、古代ゲルマン民族の冬至祭に由来すると言われ、
常緑樹に生命の力を見て、それを飾ることで魔除けや豊穡を願ったのが
始まりだそうです。

今年はリボンが飾り付けの主役として再び注目を集めています。

かわいらしさや女性らしさが人気の理由のようですよ (๑>๑<)。♡



木々の葉が落ち、冬枯れの風景が広がる頃
どこかでやさしい鈴の音が聞こえてくるような…
そんな季節になりました。

ゆく年をそっと見送る12月は、日々の忙しさの合間に
小さな幸せや、ふとした温もりに気づかせてくれます。
寒さが深まるほど、人のぬくもりが恋しくなる12月…
湯気の立つ飲み物、手袋越しに伝わる温度、
家々の窓辺にともる明かり…
冷たい空気の中で見つける*あたたかさ*は
冬だけの贈り物かもしれませんね…



大人たちは仕事納めや大掃除に追われながらも
1年間の出会いや出来事をそっと振り返る季節。

慌ただしさの中にも、ふと立ち止まれば冬の澄んだ空気に凜とした
美しさを見つけられる…

そんな師走の風景を皆さまと共に歩いていけたらと思います





朝ドラ「ばけばけ」の舞台へ 松江を歩く小さな旅

小泉八雲とセツが出会ったまち

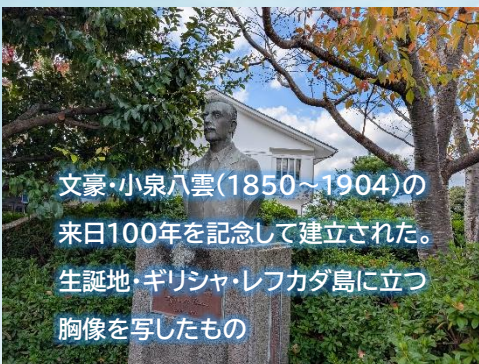
いま放送中の NHK 朝ドラマ「ばけばけ」

舞台の物語となった島根県松江の街並みには、和と洋がやわらかく
溶け合う独特の空気が流れています。

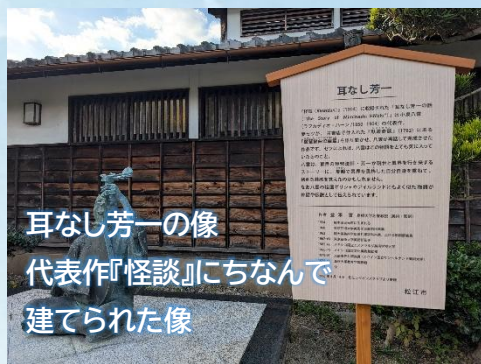
静かで、どこか懐かしくて、歩くたびに物語の続きを見ているような
旅がはじまります。



小泉八雲記念館のとなりに
小泉八雲旧居がある。
2人はお互いに惹かれ合い
心の安住の地を得ることができました



文豪・小泉八雲(1850~1904)の
来日100年を記念して建立された。
生誕地・ギリシャ・レフカダ島に立つ
胸像を写したもの



耳なし芳一の像
代表作『怪談』にちなんで
建てられた像

小泉八雲が愛したまち

松江といえば、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)

外国から訪れた彼が、この地に深く魅了されたように

水の都・松江には、今も人を惹きつける穏やかな風が吹いています。

NHK の連続テレビ小説「ばけばけ」は、

2025 年後期に放送が始まった作品です。

明治時代の松江を舞台に、小泉八雲の妻・小泉セツをモデルにした
主人公「松野トキ」の人生が描かれます。



キャッチコピー「あげ、そげ、ばけ」

松江の人にとっては「方言」ですが、県外の人にとっては純粋に「音」として面白い響きをもっている言葉です。

八雲自身も、外国人として日本語の持つ音の響きを純粋にたのしんでいたのではと考えられます。

また、松江をアゲていくこと、不要なものを削いでいくことで変化していく、
「あれも、それも、ばけるよ。」という意味を込めています。

白壁の塩見縄手を歩くと、武家屋敷の面影や静かな松並木が続き
タイムスリップしたような気分。
堀川めぐりの船がゆっくり通り過ぎる音が、旅の心をそっと
ほどいてくれます。



塩見縄手

武家屋敷風の家が堀に面して軒を連ね
松江市の伝統美観保存区域に指定
日本の道100選にも選ばれている



堀川めぐり～水の都ならではの時間

船頭さんの語りを聞きながら、低い橋の下をくぐったり、
水面の光を眺めたり…

ゆったりと流れる時間は、まるでドラマのワンシーンのよう…
冬の船ではこたつが用意され、松江ならではの楽しみ方が
広がります

明治23年、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は英語教師として松江に赴任し、この町に暮らしたのは、
わずか1年3ヶ月…武家屋敷の静けさ、霧に包まれる宍道湖、丁寧で誠実な人々の営み、西洋とは異なる
「見えないものの美」を見出した八雲は、松江を深く愛し、その体験は後の作品に繰り返し登場することになります。



朝ドラ「ばけばけ」の舞台へ 松江を歩く小さな旅

小泉八雲とセツが出会ったまち

国宝・松江城

全国に現存する 12 天守のうちのひとつで、
2015 年 7 月に国宝に指定（今年は国宝指定から 10 年）
千鳥が羽を広げたような、美しい入母屋破風が重なり合う
屋根のデザインから別名千鳥城



朝ドラマの世界を巡りながら出かける松江の旅は、どこか懐かしく
そして新しい発見に満ちています。
皆さまもぜひ物語の風景に逢いに出发してみませんか

大橋川に架かる松江城下で最も古いとされる松江大橋
そのもとにある「源助柱」の記念碑
水の都を支えてきた歴史の証
城下町の情緒がゆっくりと流れています。



松江大橋の悲しい伝説「源助柱」

慶長13年、初代の松江大橋が建設される際工事が難航し、たまたま通りかかった源助という男が人柱にされました。
源助はその朝、お茶をの飲んで家を出ようとしたところ、妻に「もう一杯飲んでゆっくりして出かけたらどうですか」と勧めたのですが、「早く仕事に行かねば」と、一杯だけ飲んで家を出てしまいました。
もう一杯飲んでいれば、その時間に橋を通ることもなく人柱になることもなかったかもしれないのです。
この話が広まり、松江ではお茶を 2 服飲む風習があります。

石垣には、かわいらしい「ハート型」の石が隠されていて
訪れる人々を楽しませてくれる、ちょっとしたサプライズ
このハート石垣を見つけると、

良縁に恵まれる：恋愛成就や素敵な出会いを引き寄せるとされています。
幸せになれる：一般的な幸福や願いが叶うというジンクスもあります。

玉造温泉でほっとひと息
美肌の湯として知られる玉造
川沿いには湯気がふわりと立ちのぼり
散策しながら足湯に浸かることも…
旅の疲れをゆっくり癒し
また明日への活力をくれる♪です。

松江大橋 唐金擬宝珠
なんで 忘れぬ～忘れぬ
さくら春雨…相合傘で
君と 眺めた 嫁が島
待つ待つ 松江は 君を待つ



二夜 逢わねば 寝れぬ枕
ひびく ろの音 波の音
恋の湖 雨戸を開けりゃ～
月に ほんのり 千鳥城
待つ待つ 松江は君を待つ



宍道湖は、島根県松江市と出雲市にまたがる、東西 17km、南北約 6km、
周囲約 47km の国内で 7 番目に大きな湖。

日本海とつながる汽水湖で、淡水と海水が混ざり合っているため魚介類が豊富。
全国有数のヤマトシジミの産地として知られ、シジミ漁は松江市の朝の風物詩…



また宍道湖の夕日は有名で、日没 30 分前から始まる茜色に染まる空と湖面に
反射する光景は、訪れる人々を魅了。湖に浮かぶ「嫁ヶ島」がシルエットとなり、
この夕日の美しさは「日本夕陽百選」にも選ばれている。
また宍道湖に浮かぶ唯一の島「嫁ヶ島」には、いくつかの悲しい伝説が残されています。
その一つが厳しい姑にいじめられていた若い嫁が、寒さで凍った宍道湖の上を
実家へ帰る途中、氷が割れて湖に落ちて水死してしまったというものです。
湖の神様がその嫁を哀れみ、一夜にして島を浮かび上がらせたことが
「嫁ヶ島」の名前の由来になったとされています。

まもなく2年…能登の今を思いながら

金沢・富山 氷見への旅路

能登半島地震から、まもなく2年

あの日から時が流れても、海と風の匂い…

あたたかな暮らしの灯りは、静かに、確かに息づいていました。

少しずつ、戻りゆく日常

それでも、人々の胸の奥にはあの日の痛みが残っています。

旅人として訪れる私たちは、ただそっと寄り添い、そこにある

「今」を見つめ、感じて歩きたい…

そんな思いを胸に向かった石川・富山の秋冬の旅です。

金沢



鼓門の大きなアーチをくぐった瞬間、
金沢特有のやわらかい光が頬に触れ、
不思議な安心感に包まれました。
金沢の鼓門は、まるで旅人を迎える
大きな額縁。

青空の下に立つその姿は力強く「この街は今日も美しいですよ」と
そっと語りかけてくれるようでした。

雪を待つ兼六園では冬支度を終えた松の木々が凜として立つ、金沢らしい風雅な景色・

ひがし茶屋街の石畳を歩くと どこか懐しく、どこか切ない…

そんな金沢らしい静かな美が息づいていました。

そして冬の金沢といえば、海の恵み。市場に並ぶカニの赤は、冬の訪れを告げる祝祭の色・

旅人の期待を裏切らない威勢のいい迫力！ここはまさに金沢の台所です。

冬の金沢は、ただ美しいだけの街ではありません。光と影、

伝統と静寂、人の温もりと海の恵み…

すべてがやわらかく溶け合う「心に寄り添う旅先」です。

能登への祈りを胸に歩くこの冬の旅はきっと、

皆さまの心をあたたかく包んでくれることでしょう。

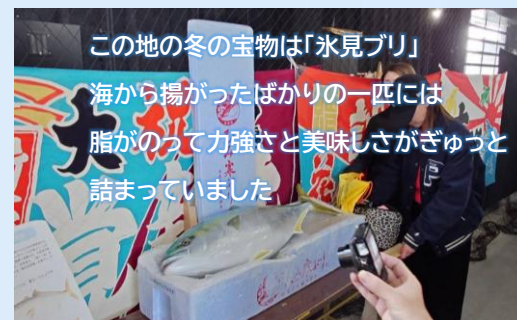
この冬、ぜひ金沢へ(●●>◡<●●)。♡ゆっくり、そっと、美しさを感じに出かけてみませんか



元日に起きた令和6年能登半島地震の発生からまもなく2年が経過しようとしています。

富山県氷見市も目には見えづらい地震の影響を受けている地域のひとつでした。

氷見市中心部の商店街では、被災したビルが公費解体され、歴史ある街並みが更地へと姿を変え、60年以上前、二度と災害に負けないとの決意でつくり上げた場所で、先人の思いを受け継いだまちづくりが始まりました。



ひみ番屋街は、氷見市の主要な観光拠点として

非常に高い集客効果 ♡ 2012年のオープン以来、累計来場者数は

1300万人を超え、2024年には中部・北陸エリアの道の駅ランキングで

1位、全国で4位にランクイン。能登地震では液状化や断水などの

大きな被害が出ましたが、1か月ほどかけて復旧、段階的に営業を再開し、

能登地域の特産物を販売するなど復興支援を続けています。

富山湾越しの立山連峰を望む美しい景色も魅力の一つです。